

はじめに

この冊子を手にする方で、デットマール・クラマーの名前を知らない人はいないだろうと思います。しかし、ご本人と直にふれあった人は、案外少ないかもしれません。

今回のシンポジウムまでは、私もその一人でした。クラマーさんは「伝説の人」であり、「歴史上の人物」でした。

その方が目の前にいらっしゃる。それが今回のシンポジウムです。

サッカー・スポーツを通して 21 世紀のゆたかなくらしづくりを“志”とする異業種ネットワーク「サロン 2002」は、2001 年度より毎年、公開シンポジウムを行っています。ワールドカップに照準を合わせたシンポジウムから、2002 年以降は「地域で育てよう！」（2003 年度）、「t o t o を活かそう！」（2004 年度）というテーマを掲げてきました。これらの内容はいずれも報告書にまとめ、関係各位に頒布し、ご活用いただいております。

「日本におけるドイツ年」である本年度は、東京ドイツ文化センターとの共催で、クラマーさんをお招きしてのシンポジウムとなりました。テーマはもちろん、「クラマーさん、ありがとう！」です。

シンポジウムは、ゲスト役であるクラマーさんの講演ののち、ホスト役であるサロン会員が、「クラマーの 4 つの提言」を踏まえた日本サッカーの現状を報告し、クラマーさんにコメントをいただく形で進みました。クラマーさんのお言葉をいかに引き出すかがポイントだと思っていたのですが、話し出すと止まらないクラマーさんは、身振り手振りで熱くメッセージを伝えてくださいました。その姿は 80 歳とは思えません。「年齢ではないのだ、心のあり方なのだ」と強く感じさせられました。報告書に“熱さ”が残っているか心配ですが、少なくともそこに立ち会った者は、クラマーさんの人柄や情熱を感じ取ったことと思います。

本報告書には、シンポジウムの内容以外にも、いくつかの読み物が掲載されています。加藤貴志さんは、今回のシンポジウムのもう一方の主催者である「東京ドイツ文化センター」のスポーツプログラム担当者の立場から、また本多克己さんは、実質的な事務局長として運営の中核となって携わった立場から、いずれもこの企画の裏方としての苦労や喜びを綴っていただきました。「クラマーの 4 つの提言と日本サッカーリーグの誕生」は、J F A テクニカルニュース(有資格指導者に配布される冊子)から転載させていただきました。クラマー以降の 40 年を振り返る記事としてお楽しみいただければと存じます。

クラマーさんがシンポジウムでおっしゃったのは、「常に前進を！」ということでした。私たちはこれからも、サッカー・スポーツを通して、21 世紀のゆたかなくらしづくりを考え、実践していきます。

目 次

はじめに	1
サロン2002理事長 中塚義実	
目 次	2
I. シンポジウム	3
資 料 シンポジウム開催要項	4
サロン2002とは何か	5
デットマール・クラマーさん プロフィール	6
シンポジウム 第1部 デットマール・クラマーさんを迎えて	7
第2部 いま語る、クラマーさんの4つの提言	24
II. 寄 稿 ～シンポジウム企画・運営の立場から～	45
「日本サッカーの父」に身近に接して	46
東京ドイツ文化センター ドイツ年スポーツプロジェクト担当 加藤貴志	
百年たっても変わらないサッカーの基本	52
株式会社クラブハウス代表取締役社長 サロン2002副理事長 本多克己	
III. 資 料	57
クラマーさん直筆のレジメ（ドイツ語）	59
クラマーさんのレジメ（和訳：成功に勝るものはない）	64
参加者アンケート	66
クラマーの「4つの提言」と日本サッカーリーグの誕生 ーアマチュアスポーツからプロスポーツへー①・②	68
中塚義実（日本サッカー協会「テクニカル・ニュース」より）	
シンポジウム参加者／報告書作成にご支援いただいた方々	72

サロン2002「公開シンポジウム2005」のご案内
クラマーさん、ありがとう！

「4つの提言」に関する、「クラマー・チルドレン」からの、40年目の報告

サッカー・スポーツを通して21世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする異業種ネットワーク「サロン2002」は、2001年度より毎年、公開シンポジウムを開催しております。

「日本におけるドイツ年」であり、2006年FIFAワールドカップ・ドイツ大会を翌年に控えた本年度のシンポジウムは、「日独サッカー交流展」の一貫として、ドイツ文化センターとの共催で、日本サッカーの父、デットマール・クラマーさんをお招きして開催することとなりました。

この機会に、クラマーさんに改めて「ありがとう！」と申し上げ、「私たちはここまで育ちました」と報告し、さらなるアドバイスをいただければと考えております。

多くの方にご参集いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

サロン2002理事長 中塚義実

記

主 催 : サロン2002、ゲーテ・インスティトゥート（ドイツ文化センター）

日 時 : 2005（平成17）年11月12日（土） 17:30～20:30（受付17:00）

会 場 : 味の素スタジアム内インタビュールーム（受付は「サブエントランス2」に設置）

※同スタジアムで、14:00キックオフで行われる「東京V vs C大阪」の試合後に開催します

※16:30以降にスタジアム脇の「ロイヤルホスト」前に集合していただければご案内します

ゲスト : デットマール・クラマー

ホスト : 賀川 浩（スポーツライター）

大橋二郎（日本フットボール学会会長／大東文化大学）

両角晶仁（t o t oプロデューサー）

中塚義実（サロン2002理事長／筑波大学附属高等学校）

総合司会：加納樹里（中央大学）

参加申込：下記事務局まで、氏名・所属(差し支えなければ)・連絡先(TEL／FAX／Email)を明記の上、Emailにてsalon@fcjapan.co.jpまでお申し込みください。どなたでも参加できます。

参加費 : 1000円。ただし学生は無料

事務局 : 本多克己、福岡哲朗、山田智子 salon@fcjapan.co.jp

注)「賛助金」のお願い

本シンポジウムの報告書を、趣旨に賛同してくださる個人または団体からの「賛助金」で作成いたします。「賛助金」は一口5,000円とし、拠出していただいた方のお名前を報告書に掲載させていただくことで、賛助の気持ちに伝えたいと思います。さらに、4口（2万円）以上の「賛助金」をいただいた個人や団体には、報告書への広告掲載も可能とさせていただきます。大きさの目安は以下の通りです。

A4版1ページ(表紙裏、裏表紙裏)…5万円以上

A4版1ページ(その他のページ) …5万円

A4版1／2ページ 3万円

A4版1／3ページ 2万円

「賛助金」をお出しいただける個人または団体は、事務局へご連絡いただいた上で、下記口座へお振込みください。よろしくお願い致します。

みずほ銀行板橋支店 普通 2076207 サロン2002プロジェクト代表 中塚義実

参考：サロン2002とは何か

「サロン2002」は、以下の設立宣言に賛同する「同志」によるゆるやかなネットワーク組織です。

サロン2002設立宣言

(2000年4月1日)

我々は、以下に「サロン2002の“歴史”」、「サロン2002の“志”」及び「サロン2002の“会員”」を述べるにより、ここにあらためてサロン2002の設立を宣言する。

【サロン2002の“歴史”】

サロン2002は、社会学、心理学等の専門的立場からサッカーの分析・研究・報告に従事していた「社心グループ」（財団法人日本サッカー協会科学研究委員会の研究グループの一つで、1980年代後半からこの名称で活動）を前身とし、1997年からは研究者という枠にとらわれない、幅広い人材によって構成されるゆるやかな情報交流グループ「サロン2002」として活動を行ってきた。

【サロン2002の“志”】

サロン2002は、サッカー・スポーツを通して21世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする。年齢、性別、国籍、職業、専門分野、生活地域などを超えた幅広いネットワークを築き上げ、全国各地にサロン2002の“志”の輪を広げ、大きなムーブメントとなることを目指す。

サロン2002の“志”を実現する上で、2002年FIFAワールドカップ韓国／日本大会は大きな節目であると認識する。国内外の様々な人々と協力しながら、この世界的なイベントの“成功”に貢献するとともに、同大会後の“ゆたかなくらしづくり”のためにできることを考え、行動する。

【サロン2002の“会員”】

サロン2002は、前項の“志”を同じくする人たちのゆるやかなネットワークである。

サロン2002の“志”に賛同した個人であれば、誰でも、“会員”となることができる。ただし会員は、サロン2002からの“Take”を求めるだけでなく、サロン2002に対して、また社会に対して何が“Give”できるかを常に考え、“Give and Take”の姿勢でいるということが前提である。

サロン2002は、会員に対して短期的な成果は求めない。長い目で見た“Give and Take”の関係が成り立っていればよい。即座のアウトプットが困難であっても、いずれ何らかの形で“Give”を考えている人なら“会員”となることができる。

2005年度の会員は現時点で123名。全国各地にいる会員は、小・中・高・大の学校関係者、Jクラブ・地域クラブの関係者、フットサルや草サッカーの関係者、新聞・雑誌・テレビ・インターネットなどのメディア関係者、サポーターやボランティア、サッカー以外の競技の関係者など多様です。国や地方自治体のスポーツ行政に携わる者や、JFA、各都道府県FA関係者もいます。様々な形でサッカー・スポーツにかかわりながら、“志”を実現させようと活動する者で構成されているのが「サロン2002」です。

「サロン2002」の主たる活動は、月例会の開催と、その内容を核とするホームページの運営です。本シンポジウムは公開型月例会として毎年行われ、人と情報の行き交う場として定着しております。

サロン2002の詳細は、ホームページ<<http://www.salon2002.net>>でご確認ください。



デットマール・クラマー Dettmar Cramer

1925年4月4日、ドイツ・ドルトムント生まれ。「日本サッカーの父」と言われるコーチ。

1960年10月、東京オリンピック(1964年)に向けた代表チーム強化のために日本サッカー協会の要請で西ドイツサッカー協会(当時)から派遣され、日本代表だけでなく各年代層の指導にあたった。サッカーの基本技術を徹底することにより日本代表を東京オリンピックのベスト8、メキシコ・オリンピック(1968年)の銅メダルに導いた。

ケガにより若くして選手を引退、コーチの道に入り、西ドイツ協会のコーチから、後にFIFAコーチになった。バイエルン・ミュンヘンを率い1975年にヨーロッパ・チャンピオンズカップを獲得したこともある。

1971年 勲三等瑞宝章 1996年日本サッカー協会75周年記念功労賞 2005年日本サッカー殿堂入り。

第1部 デットマール・クラマーさんを迎えて

加 納（司会）

それではクラマーさんをお招きしてのサロン2002の公開シンポジウムを始めさせていただきます。本日司会をさせていただきます中央大学の加納と申します。いきなり打ち明け話で恐縮ですが、きょうのシンポジウムの進行を巡って10分前まで隣の部屋でいろいろ議論をして参りました。いろいろ至らない点もありましょうが、お忙しい中せっかくいらしていただいた皆さまに、来てよかったと思われるような楽しいシンポジウムにいたしたいと思います。ご協力のほどよろしくお願いいたします。



加納樹里（司会）

今回のシンポジウムは東京ドイツ文化センターとサロン2002という組織の共同開催という形です。サロン2002につきましては、後ほどシンポジストとして登壇されます中塚理事長よりご紹介があらうかと思いますので、ここでは東京ドイツ文化センターの企画について簡単にご紹介します。皆さんご存じのように、来年のワールドカップに向けまして日本のドイツ文化センターでは今年が「日本におけるドイツ年」ということで、さまざまな形で文化交流の輪を広げていらっしゃいます。その一環として、このたび日本における日本とドイツのサッカー交流展が開催されました。本シンポジウムもその一環として開催されるものです。従いまして、きょうの開会にあたりましてはじめにドイツ文化センターでスポーツプロジェクトの進行の責任者でいらっしゃいます加藤貴志さんにご挨拶をいただきます。それでは加藤さん、よろしくお願いいたします。

加 藤

こんばんは。ご紹介いただいた東京ドイツ文化センターでスポーツプロジェクトを担当する加藤です。2005年4月から2006年の3月まで、日本におけるドイツ年ということで、さまざまなプロジェクトが日本で開催されています。文化、経済、学術のさまざまなプログラムは、1年間で合計1200以上あります。そのなかでスポーツの占める役割はとても大きく、特に2002年には日韓でワールドカップが開かれ、来年は2006年ワールドカップ

がドイツで開かれます。その間に、日本におけるドイツ年というものがあります。スポーツを文化として捉えた場合、特にサッカーについては、「日本サッカーの父」といわれるデットマーレ・クラマーさんの功績にはとても大きいものがあります。2006 年に向けて、日本のサッカーがいままでどのような形で発展してきたか、それから 2006 年以後、日本サッカーがさらにどのようにして発展していくべきかについて、きょうはクラマーさん基調講演していただきたいと思います。皆さま、お忙しい中お越しいただき、ありがとうございます。これをもちまして私の挨拶とさせていただきます。

●指導者としての天才

加 納（司会）

それでは本日のプログラムを簡単に説明申し上げます。これから 1 時間ほどクラマーさんに基調講演をしていただきます。その後はサロン 2002 が中心となりまして、3 人のシンポジストにご登壇いただき、クラマーさんが 30 年ほど前に日本サッカー界に対してされた 4 つの提言が、現在どのような形で実現されているかをご報告しながら、クラマーさんからそれに対するコメントをいただきつつ話を進めていきたいと考えております。

ではクラマーさんにご登場いただきます前に、クラマーさんをご紹介します賀川浩さんをご紹介します。賀川さんは、サッカージャーナリストとしてご高名なだけでなく、長い間日本のスポーツ界、とりわけサッカー界に多方面でご尽力なされたご経歴をお持ちです。クラマーさんとも大変親交が深いということで、今回はアテンド役も兼ねてお越しいただきました。では賀川さん、ご挨拶をお願いいたします。

賀 川

賀川浩と申します。ちょっと風邪気味で、あまり声が出ません。風邪気味なうえに 81 歳になりましてね、先日入れ歯を替えたばかりでまだ慣れてないものですから、やや発音不明瞭なところがあるかもわかりません。ご勘弁ください。

きょう会場で配られたチラシに、デットマーレ・クラマーさんと一緒に、厚かましくも私が写っている写真が載っています。クラマーさんが「75」と背番号の入ったユニフォームを持っている写真です。これは 2000 年に、中国の北京から東にクルマで 6 時間ほど行ったところにある秦皇島（しんのうとう）というところに中国足球学校がありまして、そこでクラマーさんが指導者を集めて教えていたときに、私がどういうわけかクラマーさんに会いたくなって行ったときの写真です。そのときに、1925 年 4 月 4 日生まれのクラマーさんは 75 歳だったんですね。その 75 歳の誕生日にドイツサッカー協会（DFB）が、ドイツの、上が白で下が黒のユニフォームにクラマーさんの年齢である 75 をつけたユニフォー

「日独サッカー交流展」のパンフレット

ムを贈ってきました。非常に洒落てます。写真には撮らなかったのですが、当時のシュレーダー首相からメッセージも届いてました。ドイツ連邦共和国の紋章の入った手紙にシュレーダーのサインがちゃんと入っていました。この一事から見てもドイツ協会、あるいはドイツ連邦共和国におけるデットマー・クラマー氏のポジションというかステータスがお分かりいただけると思います。



賀川 浩

私はクラマーさんについて今まで何度も書いてきましたし、私のホームページにも嫌というほど載っていますから、また見ていただくとして、とにかくクラマーさんは、天が遣わしたのか、運命がそうしたのか、サッカーを教えるためにこの世に生まれてきたような人です。指導者とはだいたい理屈っぽいものですが、クラマーさんは理路整然と論理を建てられる一方で、直感もまた非常に素晴らしいのです。この時期の、この選手には、何を伝え、教えるか、その「いま」をつかむ天才ではないかと思います。私はクラマーさんが1960年に来日して以来45年の付き合いで、ずっと一緒にいるわけじゃないんですけど、日本の選手を教えているところ、あるいはその後、彼がドイツのバイエルン・ミュンヘンを教えたところ、そういうところを見聞したり、直接話を聞いたりして、その天才をいつも感じていました。クラマーさんは24歳でドイツサッカー協会西部地区の主任コーチに就任したんです。24歳といえば日本なら大学を出てちょっとです。もちろん私と同じ戦中派ですから、第2次世界大戦中はパラシュート部隊で苦勞をしたり、いろいろな修羅場をくぐってきました。戦後、プレーヤーとして、なかなか上手な選手だったそうですが、その後ケガをされてコーチになって、24歳の若さで西部地区の主任コーチになり、それから何年か経って1960年に日本サッカー界がお世話になるわけです。

指導者にも天才がいる、ということを言うにあきらめる人がいるからあまり言わない方がいいんですけど、やはり先生中の先生という存在がおられるということだと思います。そういう指導者中の指導者とは、個人指導もできる、チーム指導もできる、戦術も語り、技術も語り、それをどうやれば上手くなるかを知っている、それを選手に実行させる力も

ある。中国の泰皇岛で驚いたのは、全国から集まっている、町々のコーチを集めて指導されていたのですが、講義の前にご自分がちゃんと勉強をして講義内容を組む。そして講義をして、75 歳でありながら、あの暑い中国の炎天下でストレッチ体操やフィジカルトレーニングと一緒にやるわけです。その後に晩の講義と一緒にやる。そこでは前日の講義の復習をしてくれる。自分で要点を書いてプリントして、前の日にこういうことをやったんだよ、ちゃんと頭に入っているか、と確認してくれる。そんなん勉強せんやつが悪いんじゃないですか、と私が言えば、彼は習ったことを生徒が覚えないのは先生が悪いからだ、ということです。我々凡夫にとっては耳の痛いことですね。しかしクラマーさんは難しい人じゃないんです。ユーモアもあり、話も面白いですから、これからたつぷりと聞いてください。どうもお邪魔しました。

●みなさんが思っているほど美化できるような過去はなかった

クラマー

こんにちは、みなさま。こんにちは、みなさま、と申しまして、「こんにちは、レディース」です。私の母はまず女性から挨拶するように、と私に言っておりました。いい男性がいたとしても、よき伴侶となる女性がそばにいないければほとんど無益だと思います。女性なくしては男性は機能しません。そういうわけで、こんにちは、みなさま。男性の方々にもご挨拶させていただきます。また、日本のサッカーファンのみなさま、ようこそお越しくださいました。ありがとうございます。

事前に講演をドイツ語で書きまして、それを翻訳したものがみなさまお手元に届いているのではないかと思います（64 ページ参照）。試合は普通 90 分あるのですが、私に残された時間は 45 分しかないので、とにかく私はこの時間内にいいゴールをしようと思っております。そういうことで、翻訳をもとにして私のことをよりよく理解していただければと思っております。私は今でも世界各国を旅しており、今まで 90 カ国を訪問しました。また今回も訪日することができました。日本は私にとりまして第二の故郷です。明日も、私の昔からの友人である長沼*さん、そして岡野*さんともお会いできることを楽しみにして

***長沼健（ながぬま・けん）** 1930 年 9 月 5 日生。関西学院大～中央大～古川電工でプレー。54 年から日本代表。62 年から同監督、メキシコ五輪銅メダルを獲得。その後一時退いたが 72～76 年まで再び監督を務めた。94 年から日本サッカー協会会長を務め 2002 年ワールドカップ招致に尽力した。

***岡野俊一郎（おかの・しゅんいちろう）** 1931 年 8 月 28 日生。東大在学中に日本代表に選ばれ 55 年に 2 試合出場。63 年より同コーチに就任し、長沼監督のもとでメキシコ五輪銅メダルに貢献。70～72 年同監督を務めた、日本オリンピック委員会（JOC）理事、国際オリンピック委員会（IOC）委員などを歴任し、98～02 年に日本協会会長に就任。現在は同名誉会長。

おります。また 12 月にはドイツサッカー協会が、長沼さんを友人としてその労をねぎらい、感謝の意を表することが決まっております。それも私はうれしく思っています。もう 45 年間、私は日本人のみなさまと真の友人となることができうれしく思っています。私、そして日本の友人とも、ずっと今まで付き合っている中で同じような形で喜びも分かち合うことができましたし、しかし、同じような心配事を今でも抱えています。



過去は素晴らしくよかったものだと振り返ることができます。過去を振り返って過去から学ぶことができるわけです。しかし人生とは、過去ではなく将来を見ていかなければなりません。過去とはこれから将来に向けてさらに発展させるベースに過ぎないのです。アメリカなどのセミナーでもお話しさせていただく機会を得ましたけれども、そのたびに思うのですが、みなさんいつも過去のことしか話していません。そしてさらに過去の話を楽しいものとして捉えようとする傾向があります。それほど、みなさんが思われているほど美化できるような過去はなかったと思うのです。世界各国をレクチャーして回っていますが、いつも私は、過去を振り返って美しかったことを話し合うのではなく、将来に目を向けなければいけないということを力説しています。これから新しい日々が始まるわけです。新しい日々とは、新しいチャレンジです。

●Ｊリーグの設立は正しいステップだった

東京ドイツ文化センターいわゆるゲーテ・インスティテュートが、きょうと明日のイベントを主催してくれているわけですが、ゲーテ・インスティテュートと申しますとヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテが基礎にあるのでしょうか。そのゲーテは「いろいろな過去があつたけれども、勇気を持って神とともに前に進まなくてはいけない」という意味のことを言っています。つまり、いろいろな挑戦を手にして、直視して、それに向かつていかななくてははいけないということです。世界中の人々、みなさん夢を見ているん

じゃないかな、という印象が私にはあります。夢を見ているということは現実を直視していないということであって、自分が願うようなイメージ、例えばそれがサッカーにしろ、夫婦関係にしろ、みんなこうありたいというイメージが強すぎて、現実を見ずにイメージだけを見ているのではないのでしょうか。そうしていると、みなさんは自分がただ単なるイメージ、夢の犠牲者になってしまうかもしれません。あるいはまた、みなさんが抱いている希望、願望の犠牲者になるかもしれません。夢を見ているだけでは不十分です。そうではなく、実行に移さなくてははいけません。夢を見てただ単に願い事をするのではなく、実際に行動を起こすということが必要なのです。

サッカーについてもそれは言えると思います。例えば、日本の今のサッカー界の状況についてです。まず日本サッカー協会が1993年にJリーグを設立したことに、この場でおめでとうと申し上げたいと思います。特に私の友人、川淵*さんにはおめでとうと申し上げたいと思います。彼はミッドフィルダーとして私がコーチをしました。Jリーグを設立したということは正しい方向に向かった正しいステップだったと思います。これは日本のサッカーを世界レベルのサッカーにするために必要なことだったのです。つまり、前を向いて前進をしていく、そういった意味でいいことだったと思います。そして問題があったとしてそれにどう向かっていくのか、それを常に念頭に置かなくてはなりません。

Jリーグが設立され、私の友人であるジーコ監督、また日本代表の選手の人たちにも、再びワールドカップに参加できたことをお祝いしたいと思います。本当におめでとうございます。しかしこれで終わったわけではなく、ワールドカップでいい試合をするということが重要なのです。そして、いい試合をするだけでも不十分です。勝っていかなくてはなりません。これは私の課題ではなく、ジーコ監督が全うしなければいけない彼の課題です。これから私たちが共通認識としてなければいけないのは、日本のサッカーはワールドカップ（ドイツ大会）が終わった後にどうするのかということです。とにかく人生においてもサッカーにおいても、成功に勝るものはないわけです。成功を達成しなければいけないわけです。では、成功をどこから手にするのか、成功するために努力しなければなりません。神様からプレゼントしてもらえるものではないのです。

***川淵三郎（かわぶち・さぶろう）** 1936年12月3日生。早大〜古川電工でFWとしてプレー。卒業後、日本代表に選ばれ東京五輪のアルゼンチン戦で同点ゴールを決めるなど活躍。日本代表24試合6得点。日本リーグは6シーズンで68試合出場、10得点。80年、日本サッカー協会の強化本部長に就任。同年、前監督の急病により日本代表監督に就任し翌年3月まで務めた。88年日本サッカーリーグ総務主事となりプロ化を決定。91年設立のJリーグ初代チェアマンに就任。02年より日本サッカー協会会長（キャプテン）となり各種の改革を進めている。

私は日本語ができませんので通訳を使っておりますけれど、本当ならみなさんと日本語でお話ししたいくらいです。ドイツ語では、自分がしっかり努力すれば神も助けてくれる、という言い方があります。夢を見たり、ただ単に願望するだけでは不十分です。これはサッカーのみならず経済界においてもそうです。例えば経済はグローバル化の中にあるわけですが、その中で重要になってくるのは成長率という数字です。そしてサッカーでは何が重要になってくるのかというと、効率、効果、進歩がどれくらいあるのか、ということです。つまり過去を振り返っている時間など全くないわけです。

●新しいタレントを発掘し、育て、要求すべき

近代オリンピックにおけるモットーは「より速く、より高く、より強く」と言われています。ここで重要なのは比較級が使われていることです。けっして「速く、高く、強く」ではなくて「より速く、より高く、より強く」です。練習しないといけません。そしてアジアの大会においては全勝しなくてははいけないのです。将来については今日から将来について考えることをしなくてははいけないのです。どうやったらいい試合ができるのか、さらにいい試合ができるのか、同じレベルに止まっていたら、これは止まっているのではなく後退しているということです。2006年にワールドカップがあつて、そこであるレベルに達したとしても、そこに止まっていたら、他のチームの人たちに抜かれてどんどん後退していくわけです。

私はみなさまと話しているときに、声も大きいし、明確に力強く話しておりますけれども、私は1960年代に日本に来たときから常にこういう話し方です。64年のオリンピックの日本チームの方々にもこういった話し方をしてきました。ただ単に甘やかしたり、頭をなでたり、お世辞を言ったりしても、何の役にも立ちません。では何が役に立つのかというと、ちゃんと批判をしてあげること、またサポートしてあげること、エネルギーに組み込むということです。サッカー界においても、次のことを見ていかななくてはいけません。

新しいタレントを持つ選手を発掘するための努力をする、見つけることができたのならその選手を育てていく、育てることができたのなら選手にあるレベルのプレーを要求するという、三つのことが大切です。「発掘、育成、要求」です。60年代、70年代に私が日本に来たときは、こういった長期的なとらえ方は残念ながらすることができませんでした。時間が少なかったので短期的なことにしか取り組むことができませんでした。その結果、メキシコ・オリンピックで日本は銅メダルを獲得することができたのです。そのみならず世界でもフェアなプレーをしたチームだという理由でフェアプレー賞を受賞しました。その前の時代においては、特に長沼健選手のプレーぶりはフェアプレーそのものでした。

当時、日本代表チームはフェアにプレーを実践し、さらに成功も得ることができ、見た人に感動を与えるような美しいゲームをすることができると証明したわけです。つまりサッカーの目的としては、美しくなければいけないし、いい試合をしなくてはいけない、そして成功を得る試合をしなくてはいけない。それが目標になります。

釜本*選手が引退してから、日本では第2の釜本選手になるような選手は見つからなかったのではないかと思います。しかし、釜本選手のようなタレントを持った選手は日本にはたくさんいると思うのです。タレントとは、どこかの場所あるいはどこかの時間に限定してあるものではないのです。サッカーのタレントを持った選手とはどこにでも、そしてどの時期にでも生まれている、存在していると思います。たとえば、日本の本州の大都市だったら必ず何人かのタレントを持った選手がいると思うのです。あるいは四国の小さな漁村でもタレントを持った選手がいるかもしれないのです。ただ、しなければいけないことはタレントを持った選手を発掘し、そしてその人たちをしっかりと育て上げるということです。日本はこれだけ人口が多い国ですので、タレントを見つけようとすると、しっかりとしたオーガナイズーション（組織）が必要になるわけです。

2006年に日本がワールドカップに参加するわけですが、その後の課題は何なのかと考えたときに、とにかくタレントを持っている選手を発掘し、その人をしっかりと育て上げて、ある程度のレベルに達したのであれば、彼にしっかりと要求する、これだけは試合の中で見せなさいと。そういったステップが2006年以降必要になっていく、それがチャレンジだと思います。こういったチャレンジは大きな課題になるので、一人あるいは小さなグループだけで達成することはできません。また、勇気や最初の情熱だけでは足りません。長期的な、しっかりとした戦略を作っていかなければいけないと思います。ですからそれなりの組織も必要だし、しっかりとしたチームワークが必要になるわけです。システムチックな形でタレントの養成をしなければならないのです。

●サッカーの進歩にしたがってコーチも進歩しなければならない

サロン2002という会の存在を今まで知らなかったもので、こういうものがあるということを変えうれしく思っています。このサロン2002の中にはサッカー関係者、スポーツ関

*釜本邦茂（かまもと・くにしげ） 1944年4月15日生。早大在学中に日本代表に選ばれ東京オリンピックに出場。67年ヤンマーディーゼルに入社、前年度最下位だったチームを強豪人気チームにし、以後日本リーグ4回、天皇杯3回の優勝をもたらした（釜本自身は早大時代にも天皇杯優勝を2度経験）。日本リーグ通産202得点。メキシコ五輪では6試合で7得点を挙げ得点王を獲得。84年に現役引退、91～93年に松下電器～ガンバ大阪監督、95年参議院議員。現在日本サッカー協会副会長。

係者、企業の方もいらっしゃるでしょうし、学術的なとらえ方をしている方々もネットワークして協力されているわけですね。こうした動きをさらに拡大して、体系化して強化していかなければなりません。タレントを持った選手を発見して育てていくためには、スカウトも必要でしょうし、トレーナーも必要です。タレントを持った人を発掘し、人選をして、さらにまた訓練をしていかなければいけないのです。

サッカーの試合を見ていますと、どんどん新しい形の展開というか、サッカーの試合自体が発展していると思います。2006 年にワールドカップのチャンピオンになったチームが持っていたものが、その後のワールドカップに通用するのかというとそうではないと思います。サッカーはどんどん進化しています。1950 年に私は監督、トレーナーの人選を行いました。そのトレーナーは 1920 年代に教育を受けた人たちです、つまり 20 年以上の経験をその人たちは持っているわけです。世間ではその人たちは偉大なトレーナーであり、有名です。しかし、1950 年代にそうした偉大なトレーナーたちに対し私なりのテストをしたところ、十分な成績ではありませんでした。つまりどんな職業でも同じところに止まっていたはず、進化していかなければならないのです。トレーナーたちもどんどん教育されて養成されて行かなくてはならない、そのためにはシステマチックな形のとらえ方、組織が必要だと思います。



選手も同じように養成していかななくてはなりません、その意味では、試合というのも今まで行っていたような小さな地域の試合だけではなく、国際的な経験も集めていかななくてはいいけないわけです。新しいタレントを発掘するのであれば、週末にでも 12 歳以下の子どもたちを集めたいろいろなサッカーの大会を行い、その現場に必ずスカウトがいる、と。当然プロのサッカーチームでもやるべきだろうし、小学校、中学校でも行うべきだと思います。それをシステムチックに実行していくことが必要です。そうして発掘をし、プロにしていくためにはいろんなリーグの大会であるとか、試合を常に行っていくことが重要です。サッカーとは理論だけで学ぶものではなく、必ず試合を通して学ぶことができるものだとは私は考えます。

タレントのある子どもたちを発掘したとして、こういったトレーニングをしていけばいいのか、その対策、形態なども十分に考えていかななくてはなりません。講演の原稿にトレーニングの方法と使用する道具なども書いてありますので参考してください。その中で必要なもの、例えば芝生、人工芝も可能だと思います。それから忘れてはいけないのはゴールです。ゴールが 2 つあるだけでは十分ではありません。いろいろなサイズの、複数のゴールを用意しておく、そして移動可能なもの。ゴールがなければサッカーになりません。とにかくサッカーというのはゴールをし、相手チームはそれを防ぐのが基本的なルールです。サッカーとは攻撃と守備があるわけです！

●試合に関係ない練習は役立たない

えー、話しているとどんどん熱くなる性格で、すみません。昔からの友人は私のこういう性格を知っていらっしゃると思いますけれど。私は養成する側に立っているのですが、我慢が足りないのが私の欠点です。子どもを教えるのであれば本当は我慢が一番重要なことです。私自身も忍耐力を養おうと思っているのですが、そう考えているうちに 80 歳になってしまいました。80 になりましたから、これから人間的にもう少し円くなっていくのではないかと思います。

それから、トレーニングに必要なのはボールです。ボールがなければどうしようもありません。ボールといいましてもサッカーボールじゃなくてもいいんです。テニスボールであってもいいんですね。使い古しのテニスボールを蹴る練習も私たちはしました。いろいろなボールを使うことで技術も向上してくるし、ボール扱いというのもよくなると思います。みなさん＊フ란ツ・ベッケンバウアーをご存じだと思いますけれども、私は彼も育てました。後にナショナルチームのプレーヤーになるわけですがけれど、彼は繊細な、きめの細かい技術をもっていました。それは、小さい頃、裸足でテニスボールを壁に向けて蹴っていたことも影響しています。

そのほかにトレーニングに必要なものはハードルとか棒、なわとび用のなわ、ロープでつり下げたボールなどです。このようなものを用意するにはそれなりの資金も必要になると思います。

タレントの発掘は大変難しく、スカウトする人たちはそれなりの目を持っていないではありません。そして、どういう範ちゅうでタレントのある子どもを捜すのかということをしつかり理解しないといけないのです。私は5年間中国にトレーナーとして従事していたことがあるのですが、タレントを発掘するときに理論的なテストを行っていました。たとえばコーンを立ててドリブルさせて時間を計り、一番速かった人がテスト合格というふうに。中国だけではなく世界各国でやっていることです。

しかしそれは実際に役立つのでしょうか。実際の試合では生きている人間が相手で、コーンではありません。この練習ばかりすれば犬でも巧くドリブルできるようになると思います。それはその状況に慣れただけであって、実際の試合とは関係ないわけです。あるいはアディダスが子どものタレントを発掘するために、腿でトスして胸で受けてといった動作をさせています。こういった動作はみなさんウォームアップでやっていらっしやると思うのですが、これが試合で役立つかという、そうではないと思います。

ゲルト・ミュラー*は素晴らしいプレーヤーだったわけですが、彼は腿でトスを上げたりできませんでした。でも 27 試合連続ゴールなど素晴らしい活躍をしています。彼は 62 試合で 68 ゴールをあげています。しかし彼は腿でトスして胸で受けてというようなみなさんがウォーミングアップでやっていることがうまくできなかったのです。いま私たちがタレントを発掘するためにやっていることやトレーニングしていることは一応学術的に裏付けがあるとされているのですが、しかし私はそうは思いません。試合とは関係ないと思います。

*** フランツ・ベッケンバウアー** 1945 年 9 月 11 日生。バイエルン・ミュンヘンと西ドイツ代表で「リベロ」という新しいポジションのプレーを完成した、世界サッカー史上屈指のオールラウンドプレーヤー。その優雅で厳然としたプレーぶりから「カイザー(皇帝)」と呼ばれた。74 年、地元開催のワールドカップ優勝時の主将。現役引退後、西ドイツ代表監督として 90 年ワールドカップ優勝に導くなど、指導者としても名声を得た。現在 2006 年ワールドカップ組織委員長。

*** ゲルト・ミュラー** 1945 年 11 月 3 日生。バイエルン・ミュンヘンと西ドイツ代表で特異な得点感覚で活躍したストライカーで、「ボンバー(爆撃機)」と呼ばれた。ブンデスリーガでは史上最多の通産 365 得点を記録、代表では 62 試合で 68 得点を挙げる。70 年ワールドカップ・メキシコ大会は 10 得点で得点王を獲得。72 年ヨーロッパ選手権、74 年ワールドカップでも大事な試合で貴重なゴールを挙げ、代表チームの優勝に貢献した。現在はバイエルン・ミュンヘンのユースチーム・コーチ。

●試合こそが一番いい「監督」だ

これから早口に終わらせないと。あと5分しかなくなっていました。とにかくトレーナー、監督の方に重要なことは試合をとにかくしっかりと観察して、ウォッチしてください。ただその見るというときにも客観的にです。主観的に、自分の祈りとか願望を入れてはいけません。そのときの目は透視眼というか赤外線というか、そういった鋭い目で見ていかなければいけません。単にボールが蹴られ、ゴールに入らず大きく越えていった、そういう事実だけを見てはいけません。どうしてゴールを越えるシュートしかできなかったのか、原因と結果がどこにあるのか、監督はそこまで考えないといけないのです。

私の考えでは、「試合が一番いい監督だ」と思います。試合を見れば、試合をしっかりと観察すればそこから自分たちの間違いはどこなのか、自分に不足しているのは何なのかを学ぶことができるのです。それを分析して、必要なものが分かって、それをトレーニングに使っていけばいいのです。本当に簡単なことなんですよ。試合があつて、それを分析して、それをもとに練習して、今度はさらにいい試合をして、と繰り返せばよいのです。教えることによって、練習をして、前進していくということです。



それから、必要不可欠なこととして、選手が試合をどこまで理解しているかをよく見るのが大切です。そして技術ですね。ボールをコーディネーションする力、操る力がどこまであるのか、そして攻撃性はどうか、オリンピックにしろワールドカップにしろ攻撃性のない選手は決して成功しないと思います。攻撃ということをみなさん誤解しないでください。相手のプレーヤーに対する攻撃性ではありません。

1960 年 10 月に日本代表チームをトレーニングしたときにすごくがっかりしました。1 人の選手が私のもとにやって来て、「トレーニングでケガをしました」と言うのです。私はそのケガを見て、「わかった、でも、あれとこれを練習しよう、必ず練習に来いよ」と言いました。そうするとその選手が「私はケガをしているんです」と言い訳しました。「どこをケガしているのか」と聞く私に、彼は「足ですよ、ねんざしたのです、だから痛みがあってどうすることもできない」と言うのです。私は「上半身もケガをしているのか」と問い、彼が右足だけだと言うので、「右足は使わないで他の身体の部分を使って練習すればいいじゃないか」と言いました。そして私は、3 kg のメディシンボールを使って彼とボールのやりとりをしました。彼にとってはその練習は過酷だったようで、次の日は右足が痛いとは言わずに普通の練習をさせてくださいと言い出しました。これが攻撃性の意味です。相手に対してではなく自分に対して攻撃的でなければいけませんね。足をケガしたからといって自分を甘やかしてはいけないのです。これに関しては 3 時間くらいしゃべることができると思います。

●テクニックは速いテンポで使えなければならない

とにかくそういった間違った理解というものが 1960 年からずっとあるのですけれども、たとえばボールを相手にとられるのではないかと不安を抱いてしまう人がいますね。そうするとボールを自分のゴールキーパーの方に戻してしまう。そういったことはよくないのです。もっと攻撃的になって、パスをしていかななくていけないと思います。

今日の昼間に行われた J リーグの試合を見ていますと、87 分間ゴールがなかったわけですね。87 分間一生懸命走っているのですが無益な労働でした。ボールがここにあって、ボールをとって、やっと自分のものにしたらとして、ゴールに近づいても、ゴールを大きく越えるシュートをしてしまった。結局 87 分間同じような動きが繰り返されていました。シュートしたら結局オーバーしてしまって、自分の陣地に戻って、またどうにかして自分のボールにして、キープして、またシュートをしようとしてくるのだけれどシュートが決まらない、そういった動きを 87 分間ずっと続いたわけですよ。私にとっては無益なビジネス、無益な活動です。1000 円で何かを仕入れても、500 円で売っては儲けはありません。しっかりとした利益がなければ倒産してしまいます。そのときに攻撃性を持たなければいけないと思います。攻撃的になって試合というものを効率よく、効果的に運ばなければいけない。それから、身体能力、精神的にも遅しくならなくてはいけません。

最近さらに重要性を増しているのが速度、テンポです。私は 80 歳ですがけれども、ある程度のゆっくりとしたスピードであれば練習できます。ゆっくりした動きであれば 80 歳の私でもどうにかなるわけです。技術力がある程度あれば 4 人対 2 人でも大丈夫です。そうで

はなく、テクニックがあるとしたらそれをどれだけ速いテンポでできるのか、相手にどれだけのプレッシャーを、プレスを掛けられながらできるのか、ということが重要です。

●トレーニングでできたことがすべてではない

そろそろ私のお話を終わりにしなければいけません。試合をするときに実力を出せるのかどうかということが重要になるわけですが、トレーニングの時にどうなのかというと、みんな「今はトレーニングなんだ」という、どこか甘えた考えがあると思うのです。速度もスペースも十分ある、リラックスしてできてしまう、試合とは違ったムードでやっているわけです。トレーニングのときのペナルティーキックではほとんどプレッシャーがないので、みんな成功するわけです。そういったリラックスした中でできていることを、試合のプレッシャーの中でしていけないといけないのです。1960 年でも現在でも基本的にいえることなんですけれども、トレーニングの時の選手の状況と試合の時の選手の状況はかなり違ってしまっています。トレーニングの時にすべてできたから自分たちは上手いんだと錯覚をしてはいけないということです。

長距離ランナーで世界記録を出した選手でも、オリンピックのメダルは一度たりとも手にできないことがあります。結局練習の時にはそれだけのタイムを出しているのに本番ではできない。つまり相手もいるし雰囲気も全然違う、その中で実力を出すことが大切なわけです。そういった意味で、タレントのある選手とはどういう選手のことかということ、結局、本当の実力を本番でも見せられる人のことだと思います。それは性格にもよると思います。

アメリカの陸上 100 メートル走者のグリーンという選手がいます。道路にいて信号が赤になったとします。私たちは買い物に行ってそこに立っていて、リラックスした形で何でもできるのですが、彼は黄色になるところで、赤になる前に走り出してしまう、日常生活でも誰よりも速く、そういった性格だそうです。ですからタレントのある選手というのは自分に対して攻撃性を持っていないとはいけないし、しっかりとした意志も持っていないといけない。自分をコントロールする能力もないといけないし、ここだぞというときにベストなものを出せなければいけない。実際にみなさんどうでしょう、本当にタレントのある、ゴールをいつも決めているような若い選手を知っていらっしゃいますか。

毎日新聞の岩谷俊夫さん、彼自身もプレーヤーだったんですが、彼と京都にトレーニングの様子を見に行きました。1961 年のことです。そこで 16 歳以下の子どもたちを見たのです。後に日本サッカー協会の会長になられた藤田静夫さんもいらっちゃって、才能のある子どもがいるのでテストしたいと言いました。少年はすごくしっかりとした体格で、かな

り頑丈そうでした。名前を訊くと、釜本と答えました。その後、彼を北海道の熊と名付けました。たくましく、がっちりしていたからです。岩谷さんと私は彼を見て、きっと将来大物になると思いました。それで彼に、家に帰って荷物をまとめて俺たちのところに来いと言いました。そうした出会いから、いい友情が生まれたのです。

●第2、第3、第4の釜本を見出すために

とにかくタレントのある選手を見つけなくてははいけません。しかし発掘はどんどん難しくなっていると思います。子どもたちは昔よりもっともっと遊びの選択肢が増えているわけです。私の子ども時代は自転車もなく学校まで45分も歩かなくてははいけなかった。私はジュニアとしてドイツで初めてプロになった選手です。私はまだ小さかったのですが、ボルシア・ドルトムントが私を確保したいと言いました。45分間かけて学校に行って、45分間かけて家に帰って、学校でも勉強しなければいけないし、クラブに入ったとしたらその時間も必要だし、私はそんなことはできないと言いました。しかし、クラブはぜひとも私をほしいということで、自転車を与えてもらいました。そうしてボルシア・ドルトムントでプレーするようになり、私は16歳にして初めて自転車を手にすることができたのです。ただ、今の子どもたちは全然状況が違います。欲しいものは何でも手に入るわけです。



私の子どもの頃は、時間があったらサッカーをしていました。サッカーしかなかったというのが私の子ども時代でした。テレビもラジオもなかったし、お金もなかったし映画に行くこともできなかった。ベッケンバウアーも同じだったといいます。彼もはじめはサッ

カーシュズを借りていたのです。自分が使い終わったら貸してくれた人に返していたのです。タレントのある選手とは、身体もしっかりとたくましく身体能力もある、そして精神的にもしっかりとしている、それから自分の目標に向かって、一生懸命に立ち向かっていく性格の人でなくてははいけません。

ドイツサッカー協会ではドイツ全土に 400 のトレーニングセンターを構築しています。1 週間に 1 回、子どもたちが自らあるいは両親に連れられて、そこでトレーニングしています。当然両親はいつの日か自分の子どもが有名なサッカースターになることを夢見ているわけです。しかしこういった目標を達成できるのはたった 5 % くらいです。しかし試合をしっかりとやろうとすれば、100 人の選手の半分、50 人以上はしっかりとした選手がいて、それなりの発掘をしていかななくてはなりません。すごくいい選手が 50 人いれば、25 人はまあまあでもいいわけです。もっとすごくいい選手が 25 人ということになるわけですが、そのなかでもナショナルチームに入れるのは 100 人のうちの 5 %、5 人に過ぎないのです。ピラミッドのような形、つまり底辺を厚くして、そのなかで全体の質を上げていけば 5 % の質もよくなります。

こうしたチャレンジを私たちは抱えているわけです。これは厳しいだけではなく夢のあるチャレンジであるわけですから、スカウトの方、トレーナーの方、コーチの方は、組織だってこの挑戦に向かっていかななくてははいけません。私もその必要性を川淵さんや幹部の方々、またコーチ、トレーナーの方々も話しています。日本ではかなりのことが実行されていると思います。しかし、これを続行していくことが必要だと思います。自分たちの目標を見失ってははいけません。持久力をもって、あきらめずに目標に向かっていくことです。それをやっていけば 8 年後に第 2 の釜本が生まれるだけではなく、第 2、第 3、第 4 と、釜本選手に匹敵するような選手が何人も出てくると思います。今度の火曜日、神戸で釜本さんと会いますので、またそれについて話したいと思います。彼がこれまで培ってきたキャリア、そういったことについて話してみたいと思います。1962 年に彼が私に送ってくれたメッセージには、私は北海道の熊でありたくはない、と書いてありました。しかしその 6 年後の 1968 年、メキシコ・オリンピックで彼は得点王になったのです。では、これで私の講演を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

加 納（司会）

私どもは今回、日本サッカー界の過去を振り返ってクラマーさんに感謝しようという企画をしておりました。しかし過去を振り返ってはいけないというお話を最初に賜りました。この後、休憩を挟んでサロン 2002 の主催によるシンポジウムを続行したいと思います。

（休憩）

第2部 いま語る、クラマーさんの4つの提言

加 納（司会）

それでは定刻になりましたのでシンポジウムの第2部を始めさせていただきます。ホストであるサロン 2002 から何人か代表の方にコメントをいただきまして、クラマーさんのご意見をいただくという形で進めて参ります。すでに登壇されておりますホスト役兼本日のシンポジスト、コメント役であります3名の方を簡単にご紹介させていただきます。

みなさんから向かって左側は、両角晶仁さんです。現在、独立行政法人日本スポーツ振興センター、といいますと長いのですが、いわゆる t o t o を販売する機関にお勤めです。販売にもご熱心ではありますが、それ以上にそこで得られました資金をいかにサッカーや日本のスポーツ文化を育てるための環境整備に投資できるか、ということに大変熱心に取り組んでおられます。本日は芝生のグラウンドなどを中心としたご指摘、ご発言をいただくことになると思います。

続きまして、中央にご着席されているのは大橋二郎先生です。大橋さんは現在大東文化大学で教鞭を執られております。長らくサッカーのゲーム分析をご研究されていまして日本フットボール学会の会長も務められております。今日はご専門の分野から、また指導者育成の面からご発言をいただくことになると思います。



左から両角晶仁 大橋二郎 中塚義実

最後に、サロン 2002 理事長、中塚義実さんです。中塚さんはこのシンポジウムを主催する一端であるサロン 2002 の設立者であると同時に、筑波大学附属高校で教鞭を執られています。いつもですと大変お元気なのですが、数日前にぎっくり腰を患われまして、ちょっと苦しいコンディションの中、がんばって登壇していただきました。余談ですけれども、ぎっくり腰はドイツ語で「魔女のひと突き」と申します。魔女は私ではございません。ご本人によりますと、毎年ワールドカップの前にこういうアクシデントがあるということで、サッカーの神様が中塚さんを試されているんだと私は思います。

ここから先はシンポジウムの進行役であります中塚さんにバトンタッチしたいと思います。よろしくお願いいたします。

●クラマーさんが残した 4 つの提言とは

中 塚

あらためまして、みなさんこんばんは。魔女に突かれた中塚です。クラマーさん、賀川さん、ともに 80 歳とは思えない元気な、そして勢いのある、我々に勇気を与えてくれるようなスピーチをいただきました。後半戦、残りは 1 時間半と限られた時間ですが、クラマーさんありがとう、というところへ何とか話を持っていきたいなと思います。

東京ドイツ文化センターとともに主催者であるサロン 2002 がどういう団体かということにつきましては、お手元に A 4 判の説明があると思います。「サロン 2002」の名称で活動を始めたのは 1997 年です。今は 2005 年ですが、名称は「サロン 2002」のままです。これは何を意味するかというと、さきほどのクラマーさんのお話の続きで申しますと、サロン設立当初から、大事なのは 2002 年の後なのということ、そして 2002 年以降の豊かな暮らしを考えると、2002 年に得られたネットワークや、施設やその他の財産をどのように活かしていくか、そういうことを考えている、いろんな分野の人間が、知らず知らずのうちに集まって今日に至るというネットワークです。2002 年は原点であり、メモリアルイヤーでもあるので、名称も引き続き「サロン 2002」としています。

先ほどのクラマーさんのお話の中にも、過去はあくまでもベースであって、現在を踏まえ、そして将来に向けてどうするのが大事だ、というご発言がありました。2006 年以降、あるいはもっとその先、どのようなサッカー環境、スポーツ環境にしていくか、そういった夢のあるディスカッションをしていきたいなと思います。ただ時間も限られているものですから、おそらく本日ご参加いただいた会場の方々からご質問やご意見をいただく時間は取れないんじゃないかと思います。あらかじめご承知おきください。

我々のシンポジウムのサブタイトルは「4つの提言に関するクラマー・チルドレンからの40年目の報告」です。「40年目」というのは、クラマーさんが東京オリンピックでコーチされ、そしてオリンピックが終わった翌年、日本サッカーリーグがクラマーさんの提言をきっかけにして発足しました。それが1965年です。ちょうど40年前です。「クラマー・チルドレン」というのは最近の流行言葉を利用しただけでして、正確にいうとクラマー・グランドチルドレンなのかもしれません。クラマーさんの指導を受けた指導者に私も教わり、間接的にクラマーさんの教えを受けたと思います。東京オリンピックを終えたときにクラマーさんが我々に残してくれた「4つの提言」、とあえて言わせていただきますが、それを柱にしながらそれがいま、我々の国でどういう状況になっているのか、たとえばどういった問題を抱えて、それをどうクリアしていけばいいのだろうか、そういうことに関し、てクラマーさんにさらになるアドバイスをいただきたいなあと、そういうことです。

我々は議論のきっかけとして2、3のスライドを紹介し、そしてクラマーさんにアドバイスをいただく、こんな形で進めていきたいと思います。4つの提言とは、

- ・ **トップリーグを作ること**

（これによって高いレベルのサッカーを日常生活の一部にすることができる）

- ・ **指導者を養成すること**

（そのための仕組み作り、選手、指導者、審判、マネージャーなど人材を育成する）

- ・ **日本代表チームを強化すること**

（毎年ヨーロッパに遠征して強化する）

- ・ **芝生のグラウンドを作ること**

（すぐれたプレー環境を用意する）

です。これらを40年前にクラマーさんが提言してくださいました、と我々は解釈しています。この4つのそれぞれについて、議論を進めていきたいと思います。

さて、まず「環境」を取り上げましょう。芝生のグラウンドづくりに関連して、サッカーくじ toto の収益がそこの役立てられているということで、両角さんから最初の問題提起をお願いします。

●芝生のグラウンドが育成に与える影響とは

両 角

toto の発売元におります両角と申します。よろしくお願いいたします。私どもサロン 2002 のシンポジウムは、例年だいたい20～30人という参加者です。今年はクラマーさ

んのおかげでこんなにたくさんの方に集まっていただいて心より感謝しております。今日、t o t o の発売元として、販売促進のグッズを受け付けで配らせていただきました。たくさん配ることができたので、これが残ると今日僕は帰りに駅で配らないと家に帰れないんですけれども、クラマーさんのおかげで配らないで帰ることができそうです。二重の意味でありがとうございました。

本題です。残念ながら日本にどれだけ芝生のグラウンドがあるかという統計はなかなかとれない状況にあります。それにはいくつかの理由がありますが、ひとつは日本のグラウンド数に関するデータを、たとえば観光を所管している役所と教育・スポーツを所管している役所で、それぞれ持っているような状況があって、なかなか統合的なデータが取れていません。日本の子どもたちが学んでいる学校のグラウンド、これは子どもたちのサッカーの練習や試合の舞台にもなっていますが、全国の小・中学校で芝生のグラウンド（校庭）を持っている学校はわずか数パーセントという現状です。ある調査では、2005 年度の小中学校約 33,000 校のうち、芝生のグラウンドは 1,000 校あまり、高等学校でも 4,000 校中 300 校弱という結果が報告されています。

日本にはこの他にも、地方公共団体や企業が持っている芝生のグラウンドがありますので、学校のグラウンドだけが問題なのではありません。しかしながら、現在、日本サッカー協会の第4種、小学生のチームですけれども、その登録数は 8,389 チームです。少子化の影響があるといっても、これほど多くのチームに対し芝のグラウンドでサッカーできる子供たちが 1 割に満たないという現状に大きな問題があることは確かです。これに対し、私たちが販売している t o t o の収益で、2年間で総額 7 億 7000 万円、全国 32 カ所に芝生のグラウンドを整備しています。

日本の少年たちはなかなか芝生のグラウンドでサッカーをすることができません。クラマーさんは 40 年前に芝生のグラウンドのことを私たちに提言してくださいましたが、子どもの頃から芝生のグラウンドでサッカーをするということが全体としての競技力向上にどのような影響を与えるのか、お話を伺いたいと思います。

●芝生は子どもたちがサッカーに触れるチャンスを増やす

クラマー

芝生のグラウンドを作ることは不可欠だと思います。私が子どもの頃はどこでもサッカーをすることができました。裏庭とか道路とかでもできましたし、道路の交通量も今の 5 % くらい、あまりクルマが走っていなかったというのが当時の状況です。ですからみなさんもご存じのストリートサッカーという形でボールを蹴ってサッカーを楽しんだ、そういう

言葉が存在したわけですが、現在ではストリートサッカーは存在できなくなっています。

ニューヨークなど資金のある都市では、町のひと区画を封鎖して、そこを子どもの遊び場にするような形にして、インフラを整備しているようなところがあります。ドイツでもそこまで大がかりではなくても、同じような形でグラウンドみたいもの、敷地を作って子どもたちが自動車にひかれないように注意しなくていいような、存分に遊べるような場所を提供しているところもあります。そうすると4対4とか7対7といった形で2つのチームがサッカーの試合をすることも可能なわけです。ただ、日本のことを考えますとかなり状況が違って、そもそもグラウンドにする場所がないという問題があると思います。そこで、サッカーに触れるチャンスを作るために、私はグラウンドの整備を、できれば芝生のグラウンドを、と言ったわけなんです。



とにかく必要なことはサッカーに触れる機会が、十分に多くチャンスがなければいけない、そういう回数が多ければ多いほどいい、なるべく毎日のようにサッカーに触れてもらえば、と思います。私は学校に行く前にも学校から帰ってきても、それから休みの時は毎日のようにやっていました。

子どもがサッカーを学ぶためにどんな手段が一番いいのかと考えると、サッカーの試合をするのが一番いいのです。小さいスペースで4対4でもいいので、しっかりと試合ができればサッカーが上達すると思います。簡単なルールを適用して実際にプレーすることが近道です。私が子どもの頃には審判も必要ありませんでした。2つのチームがあって、それぞれのキャプテンが誰なのかが分かっていたら、問題があったときにはキャプテン同士が話し合っ、子どもなりのルールを作っ、サッカーを楽しんでいたわけ。試合をするときも決してけんかをしようというのではなく、本当にサッカーを楽しみたかったという気持ちが根底にあったと思います。7歳の子どもが12歳の子どもと一緒にサッカーをすることによって、7歳で身体は小さくても12歳の子どもに対してどのようなテクニックでどのように対抗すればいいのかということを学ぶことができたのです。まずはやってみることが役に立ちました。次のステップで実力を上げていくという段階になると思います。

そこでどうしても必要なのが芝生だと思います。アスファルトやでこぼこの道路で練習しているとパフォーマンスをよくするのは難しいと思います。質という意味で、よい試合をしようとする芝生は必要不可欠です。グラウンドが小さければ、天然芝ではなく人工芝でも十分だと思います。人工芝だと初期投資は高くついてしましますが、維持がしやすくなると思います。

●人工芝にはメリットもデメリットもある

どうして私が40年前に芝生のことを話したのか。ワールドカップ予選を突破するための韓国戦がありました。その準備のために日本のナショナルチームに関わったわけですが、東京大学の大変古いグラウンドで練習しました。そこは粘土質の、砂埃がたくさんグラウンドでした。岡野さんが私のアシスタントで、彼は通訳もしてくれていたのですが、ヘディングの練習をするためにボールをつり下げるような機材も用意してくれました。しかしその練習でも、足のくるぶしの高さまで泥だらけで靴の中に泥が入ってきっていたんです。そのときに私は、こんな状態ではまともな試合はできない、世界に通用するにはそれなりのグラウンドが必要だと言いました。

1960年、61年、62年と同じような状況が続いて、63年になって少し状況がよくなりました。チームを改善させて向上させていくためにはぜひとも芝生のグラウンドが必要だということを私は力説したわけ。アメリカから人工芝が購入されて、投資額は高かったのですが維持費を抑えることができました。平らなグラウンドでは、プレーヤーがインサイド、アウトサイド、インステップを使って意図どおりにパスを出すことができます。人工芝はそういったメリットがあると思います。以前はでこぼこなのでボールがウサギのように跳ねてしまって、どうバウンドするのか分からなかったという有様でした。

ただ人工芝もデメリットがあります。ベッケンバウアーも人工芝で初めてケガをしてしまいました。ニューヨーク・コスモスでプレーしたとき、人工芝の上では身体が自然に滑らないので、彼は内側の靭帯をケガしてしまったのです。アメリカン・フットボールの選手たちがストライキをしたということをみなさんご存じかもしれませんが、彼らも重装備で身を固めていますがそれでも傷ついてしまうんですね。人工芝は止めてくれとストをしたのです。

中 塚

ありがとうございます。賀川さん、どうぞ。

賀 川

彼が最初に日本に来て、なぜ芝がないんだ、なぜ練習グラウンドにシャワーがないのか、と言ったものですから。特に芝生は日本では育ちにくいですね。スコットランドやイングランドのように放っておいたら勝手に芝生ができるようなところとは違うんだとか、言い訳をしたんですけど。日本では多くの人が芝生は贅沢だと思っているという話をしたところ、彼が最初に僕に言ったのは、子どもたちがせっかくサッカーをやりに来て、ぶつかって倒れたりして異変が起こるのはしょうがないけれども、下がでこぼこでひっくり返って、石ころだらけのグラウンドで擦り傷をして、それをなぜ大人が平気で見ているんだ、と。そういうことでサッカーを嫌いになっても困るじゃないかと。やっぱり子どもたちのためにも芝生を作ってやりなさいと言われました。そのころ日本は貧乏でありヨーロッパのプロのチームと試合ができなかったとき、ソ連のチームが来て、彼らが言ったのは、これだけ立派なビルディングがいっぱいあるのになぜ芝生のグラウンドがないのだ、と。そういうことを思い出しました。

●昔はちょっとした道路や裏庭でサッカーをした

中 塚

ありがとうございます。芝生の話だけでひとつのシンポジウムが終わってしまうくらいの勢いです。次の人材育成との関連なのですが、クラマーさんのお話のなかにストリートサッカーの話が出てきましたが、特に都市部にはグラウンドどころかボールを蹴るスペースがない、そして子どもたちがやれ塾だ、やれお稽古事だと時間を失い、そしてなんといっても子どもの数が減ってきて遊ぶ友達仲間がいらないという、時間、空間、仲間の喪失という状況があります。日本ではストリートサッカーどころか、子どもが集団で遊ぶということ自体がなくなっている一方で、バーチャルな遊びが増えてきている。そのなかで、かつては考えられなかったような、子どもによる事件が起きたりして、多くの人が心を痛めています。ドイツでは、おそらくベッケンバウアーの頃は子どもたちがいっぱい遊ぶ

なかで優れたプレーヤーが育ってきたと思うのですが、いまやドイツも都市化などの点では日本と似ているんじゃないかなと思います。とするなら、今、そして将来に向けて、ドイツサッカーがそういった点についてどういった取り組みをなさろうとしているのか、教えていただきたいのですが。

クラマー

ドイツでも状況がかなり変わってきているので、ストリートサッカーを行うということ自体が不可能になってしまいました。先ほど言ったように、昔はちょっとした芝生や裏庭、道路などでサッカーをしたわけですが、そこにはビルが建ってしまったたり、道路もクルマで溢れてしまっています。しかし、状況が変わってストリートサッカーができなくなったからといって、昔のことを考えて泣いてばかりもいられないわけです。ドイツのストリートサッカーの最後の世代は 1974 年の代表チームです。(ゼップ) マイヤー、ベッケンバウアー、ミュラーたちです。その後はドイツでもストリートサッカーの世代ではなくなってしまいました。なくなってしまったとことのデメリットとは、日常でサッカーに触れるということがなくなってしまったことです。当然クラブはあるのですが、子どもたちは 1 週間に 2 回くらいクラブに行って 90 分サッカーをすることになって、日常のサッカーではなくなったわけです。私たちの世代は毎日毎日サッカーをやっていたわけです。毎日サッカーに触れることができたので、反応の自動化ができていたと思います。目で対象物を見て、そのシグナルが脳にいった、神経が刺激されて筋肉へと指示が伝わっていく、そのような反応が自動化されていたと思うのですが、ストリートサッカーがなくなってしまったので、そのような機能も衰えていると思います。

●決まりきった練習は無意味だ

先ほど言ったように学術的な観点からやりすぎていると思うのです。考えすぎていると思います。私も何人かの監督コーチを養成しましたが、そのなかの何人かが今 J リーグで活躍しています。88 年から 90 年の 3 年間くらいですが、私は毎年数週間日本に来ていました。検見川グラウンドに男性と女性のコーチを対象として行ったわけです。平木（隆三）さんと日本全国を回りました。私たちがしようとしたのは自分たちが育てた指導者をさらにサポートしようということで、リーグのチームを訪問したわけです。ライセンスを取るために検見川に 3 カ月もいた人もいました。ここから核心に入るわけですが、このプログラムは、組織、オーガナイゼーションがパーフェクトでした。これまでの私の人生のなかでそこまでオーガナイズしたことは一度もなかったと思うくらい素晴らしいもので、NHKがこの様子を撮影して放送しました。

若手のトレーナーの人たちは始まる 30 分前にグラウンドに出ていなくてはいけないとい

うようなルールの下にオーガナイズされていました。それから 90 分のトレーニングプランを書いた紙をたたんでポケットに入れて、それを見ながらトレーニングを進行させました。4 つのゴールを用いて練習しました。最初にある 2 つのゴールに加え、ハーフラインのところに移動式のゴールを立てて、という形です。サッカーボールも必要なものはそれぞれのゴールに分配されていました。それぞれのチームの人たちは赤と黄色のユニフォームで識別されていました。メディシンボールも必要なところに置かれていたし、縄跳びの縄も必要なところに準備され、すべてオーガナイズはパーフェクトでした。メニューの中では 1 分たりとも時間を失ってはいけないという考えでした。何かを取りに行くという手間も省けるわけです。15 分ごとに違ったトレーニングを行っていました。トレーニングが始まる前にどういった練習するのかは知らせていたわけです。15 分間ウォームアップ、15 分間持久力のための練習、その後スプリング運動をやりました。

しかしながら、その練習で、私がとても頭にきたことがありました。私の友人でもあり、私が育てたコーチなのですが、後ろからけっ飛ばしてやろうと思ったくらいです。シュートの練習は 15 分間で、シュートは常にペナルティーエリアの外、18m~19m 離れたところからでしたが、その 80%は入らず、20%のシュートが決まりました。そのコーチは、だからといって何をするわけでもなく、腕を組んでハーフラインのところにいてその光景を見ているんです。15 分経ったら、きっちり 15 分で、よし止めろ、と。そういった練習を続けるのは無意味なことであって、時間の無駄だと思います。それは、いいように見ようとすればシュートの練習だったかもしれません。しかし、私はまったくシュートの練習にはなっていなかったと思います。距離はいつも同じ、パスも同じ、ディフェンダーもいない、修正する指示もまったくなく…。

話は変わりますが、以前、日本代表チームでプレーしていたある選手のクルマが BMW で、他の選手のは日本製だったのです。私はその BMW の選手に、日本車のどこが気に入らないんだ、なんでわざわざ輸入車を買うんだ、いくら出したんだ、と聞いたのです。ルンメニゲ*選手も 19 歳でメルセデスのスポーツカーに乗っていました。私は、お前、明日そのメルセデスをすぐに返品しろ、大衆車であるフォルクスワーゲンを買え、と言ったのです。彼は実際に私のアドバイスを聞いて、すぐにクルマを変えました。それも教育の一環だと思うのです。そうしたからこそ今の彼があると思います。ルンメニゲ選手はワールドクラスの選手になりましたが、日本代表の BMW の選手はなれませんでした。

* カールハインツ・ルンメニゲ 1955 年 9 月 25 日生。70 年代の中頃、バイエルン・ミュンヘンの黄金期に登場し、80 年代の西ドイツ代表の中心として活躍したストライカー。80 年ヨーロッパ選手権優勝の原動力となり、80 年と 81 年の 2 回にわたりヨーロッパ最優秀選手賞を獲得。イタリア・セリエ A のインテルを経て、キャリアの最後はスイスでもプレーした。



●ルンメニゲは左足の弱点を克服した

要するに、トレーニングをするのであれば、間違いというものをしっかりと指摘しなければいけないということです。シュートの、ただ結果を見るのではなく、何がダメなのかを見なくてははいけません。いつもボールがゴールの上をどんどん越えてしまうようなことがあったとすれば、低いシュートができるまで修正していかなければいけません。

私はルンメニゲ選手とそうした練習をしました。彼が私のところに来たときは彼の左足は消え失せていたというくらい役に立たないもので、不得意だったんです。私は彼に、お

前の左足はないも同然じゃないかと言ったのです。お金を取りに行くときだけはお前は左足を使って歩くけれども、それ以外にお前の左足は何の役に立っていない、と。私が担当したチームでは初めは午前も午後もしュートの練習をし、夏になると夕方、私はルンメニゲ選手とさらに 90 分、3 回目の練習をしました。1 日 3 回の練習をしたわけです。冬になりますと暗くなってできませんから、昼に 90 分の練習をもってきました。午前、昼、午後と。彼には、お前がナショナルチームに入るまではお前にどこまでもついていって、修正してやるぞ、と言ったのです。

彼は 21 歳にしてナショナルチームに入り、その後、イタリア代表との試合で活躍しました。そのときの得点は、全然ダメだった左足であげたものだったのです。その 2 年前、彼の左足は本当にひどくて、家具でも何でもいいから蹴ってみろといっても当たらないくらい、彼の命中率はひどかったのです。

ゴールをしようとするとき、通常どこにシュートするでしょう。ゴールキーパーが出てきたら、どこにシュートしたらいいのでしょうか。狙いは、逆サイドの、ゴールの後ろのネットではなくサイドネットに入るようにしなくてはなりません。ルンメニゲはイタリア戦で、ディフェンダーをかわして逆サイドに左足でシュートしたんです。

ストリートサッカーがあったときには子どもたちはそういった技術を自然に学んでいったわけですが、今は生活環境がかなり変わってしまってストリートサッカーが不可能になってしまいました。いまや、そのストリートサッカーで学んだ要素をコーチ、トレーナーはトレーニングに取り込まなくてははいけません。しかし、それをやっていないと思います。トレーニングをするのはただ単に見せるためのものではなく、自己満足のためのもでもあります。目的があつてのトレーニングなのです。戦略的な技術というものを身につけなくてははいけない、そのためにトレーニングをするのです。

●ストリートサッカーがなくなったことを悲しんでも仕方ない

イタリア人たちはボールアーティスト、本当にサーカスのような素晴らしいボール扱いを見せてくれます。同時にいくつものボールでリフティングしたりします。エンリコ・ラステリにベルリンまでトレーニングに来てもらったことがあります。そこで彼は、5 つのボールでリフティングをして見せてくれました。

エンリコ・ラステリ 1896～1931 年。イタリア人ジャグラー。サーカスなどで活躍し、それまでになかった全身を使った革新的なジャグリングによりヨーロッパ中で名声を博したと言われる。

韓国に金容植*さんという方がいました。残念ながらもう亡くなられたのですが、若い頃東京で勉強されて1936年には日本のオリンピックチームでプレーしました。その後彼は韓国ナショナルチームの監督になり、1970年のメキシコ・ワールドカップでお会いしました。彼はそのとき70歳だったのですが、ボールをヘディングして背中に回して、踵で上げる、というふうにしながらいってシュートすることができました。彼もまたボールアーティストであると言えます。彼は本当に一生懸命練習したと思うんです。

エンリコ・ラステリには、サーカスから生まれたような、持って生まれたものがありました。しかし、4対4のミニゲームを一緒にやったとき、彼はサッカーらしいサッカーを全然できなかったのです。リフティングは素晴らしかったし、ボール扱いではワールドクラスかもしれませんが、しかしサッカーのプレーになるとあまりよくなかったのです。

何を言いたいのかというと、見た目に美しいものだけの練習をやっても仕方ないことで、試合に必要なのは何かと把握した上でそれをトレーニングに生かさなくてはならないということです。ストリートサッカーがなくなったといって泣いていても仕方ないのです。ストリートサッカーでなぜ子どもたちが自然にプレーを覚えたのか。ストリートサッカーにはそれなりの要素があったわけです。いまはそれがいないから、その要素をトレーニングの中に取り入れていけないといけない、それが私の言いたいことです。

私は、ドイツで少なくとも1万人のトレーナーを養成したと思います。その人たちは独立していきました。彼らは学んだことの論理的な部分を、ただトレーニングに生かしているだけです。本当の原点は試合なのです。原点に帰らないと前進はありません。システムがどうのこうのと、論理的なことばかりを話すコーチや選手がいますが、肝心ことが分かっていない。どうやって走ったらいいのか、具体的なことが分かっていたらシステムが何であろうと役には立たないのです。

●子どものときと同じように熱中できるトレーニングを

きょうのヴェルディは今日の試合の最初の30分ほどで3回のゴールチャンスがあったと思います。30分のうちに3回ゴールチャンスがあったのに決められない、ならば一体何回ゴールチャンスがあればシュートを決められるのでしょうか？ ディフェンダーは離れてい

金容植 1936年ベルリン五輪に日本代表として参加し、スウェーデンを破ってヨーロッパ中を驚かせた「ベルリンの奇跡」のメンバー。韓国サッカーの英雄的存在で、運動量の多いMFとして、またドリブルやプレスキックの名手として有名だった。後に韓国代表監督を務めた。

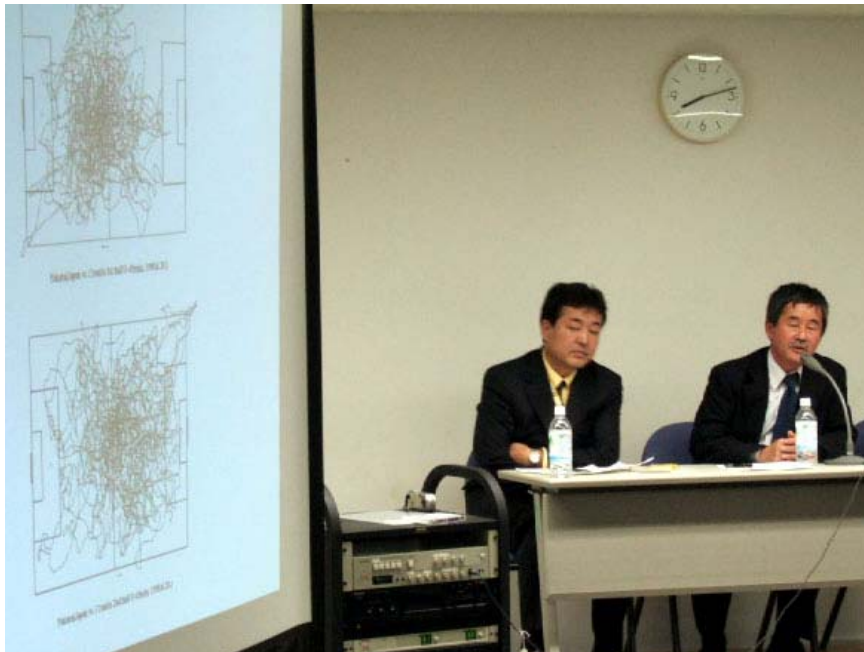
て、シュートを邪魔しようとしている者がいなかったのに、それでも決まらないのです。みなさんには耳が痛いことかもしれませんが、何度も言います。競争するための技術、テクニックというものが欠けているわけです。サッカーとは最後の最後は技術だと思います。勝てなければコーチのやり方がまずいということです。

シュートをするトップの選手が、ゴールエリアの中でシュートする、キーパーに向かっていくようなシュートをしました。キーパーに2回も跳ね返されて3回目にはゴールの上に行くシュートをしてしまった。全然決まらないのです。何をしようとしているのかまったく分からなくて、目の見えない犬のように、ただただボールを蹴っているだけなのです。ドイツでは視覚障害の方は黄色に黒の点の入った腕章をしているのですが、まったくわけのわからないプレーをする選手を後から呼んで、腕章が必要じゃないのか、どこを見てプレーしているんだ、と叱ったこともあります。

ボールを蹴ることは誰でもできます。シュートが決まるかどうかは技術によって決まります。その技術はどこで養成するかというと、トレーニングにおいてなのです。どの職業においてもそれなりの技術が必要だと思います。それを習得していかなければいけない。

今のバイエルン・ミュンヘンの選手の半分はベッケンバウアーが現役時代にもらっていた給料の10倍はもらっています。世界のベストプレイヤーであったベッケンバウアーのなんと10倍です。その選手たちはいつもスタメンというわけではなく、交代させられる選手もいるわけですが、それだけ高額のお金をもらっている選手がたくさんいるわけです。大切なことはトレーニングの時に、12歳の子どもが一生懸命サッカーをするのと同じように熱中できるトレーニングなのです。先ほどルンメニゲの左足の例を出しましたが、選手自身がどこに欠点があるのかはつきりわかって、分析した上で技術の向上が可能になります。

質問はドイツのサッカー協会がストリートサッカーがなくなってどういったことを考えているのかということでした。ドイツサッカー協会とは誰なのかという問いを返したいと思います。サッカー協会の人は事務所で仕事をしている人で、サッカーについては何の経験もないし何も分かっていないんですね。会長もそうだし。日本のサッカー協会はより多くの経験者がいて、素晴らしいと思います。長沼さんはアジア圏でそれまでの最優秀プレイヤーだったと思います。川淵さんもそうです。彼はオリンピックに選手として出場しました。岡野さんも万能選手でした。サッカーもスキーもこなした人です。そうした経験者がトップに名を連ねるのはFIFAでもないことです。バイエルン・ミュンヘンと日本だけです。バイエルンでは、ベッケンバウアー、ヘーネス、ルンメニゲといった、ワールドカップで活躍した人たちがクラブのマネジメントをしているのです。



●長年のゲーム分析からわかったこと

中 塚

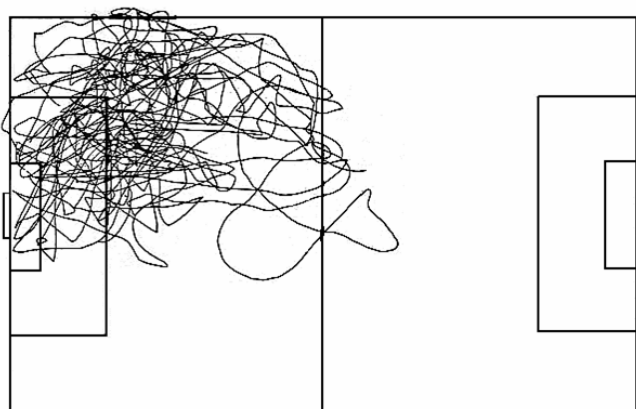
ありがとうございます。まだテーマの2つ目なんですが…。時間がなくなってきましたが、こちらで用意した次の題材がありますので、大橋さんお願いします。

大 橋

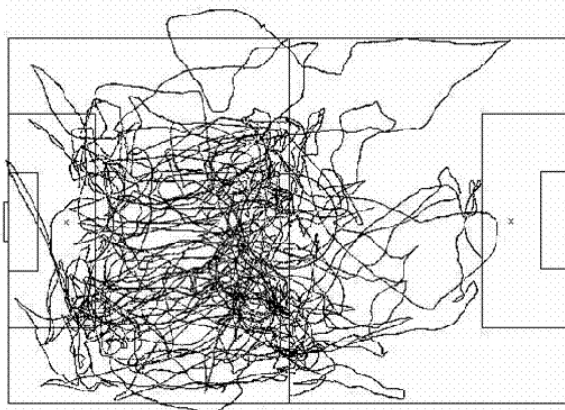
オーディに乗っている大橋ですけど、明日カローラに買い換えなきゃいけないですね。クラマーさんがきつと釜本選手の話をすると思っていました。そこで古い資料を探してきましたので、みなさんにもお見せしたいと思います。1967年のオリンピック予選の時、フィリピン戦、これ何か、たぶん15－0のときの、釜本選手が試合中どこにいたかというグラフです。全移動距離はたぶん3.5kmくらいではないかと思うのですが、動きの量としては少ないですね。次の韓国戦のほうが範囲は広いのですが、かなりシビアな試合で、私も国立競技場で見ていました。結果は3－3でしたか。高校2年生の時だったのですが…。歳が分かってしまいますね。

次は、1998年のワールドカップ・フランス大会の城彰二選手の動きです。たぶん、距離的には倍くらい動いています。とうとう点が取れなかった選手です。私はフランスにいたものでよく分らなかったのですが、日本ではテレビでずいぶん非難されていたということの後で聞きました。点が取れないということだったと思うのですが…。

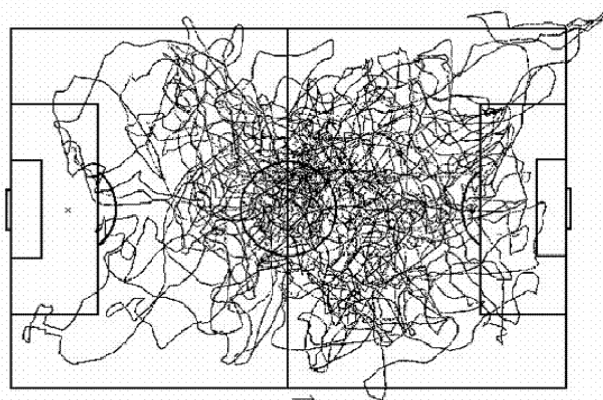
次は同じフランス大会、クロアチア戦の中田英寿選手の動きです。トータルで 13km くらいだったか、かなり広範囲に、しかも精力的動いていまして、後半の方がアグレッシブに動いていた、という印象です。



Kamamoto(vs Philippine) 2nd 1967

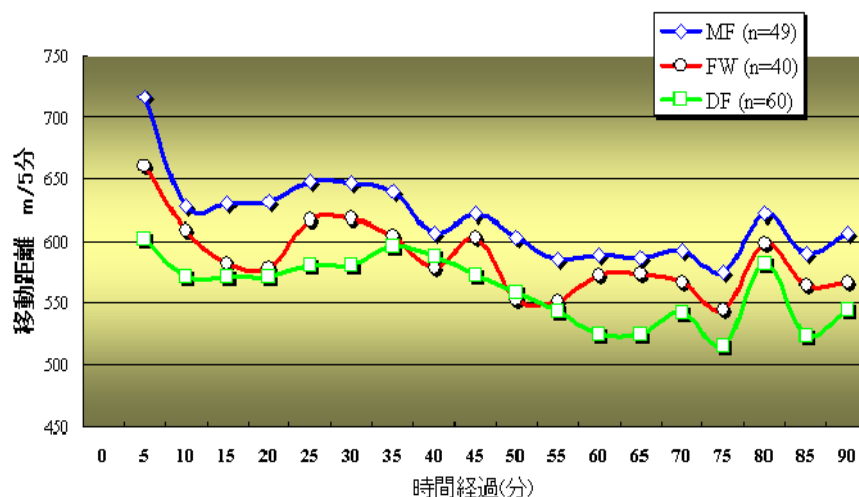


Jo(Japan vs. Argentina 1st half 0-45min. 1998.6.14.)

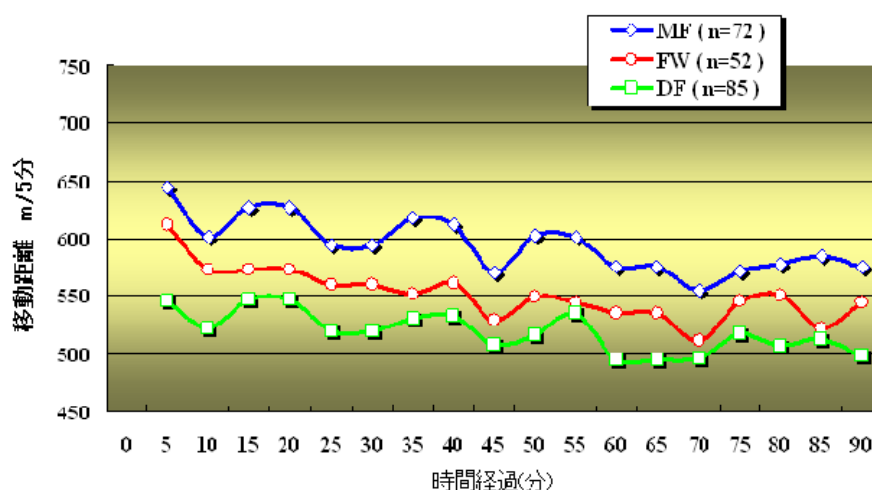


Nakata(Japan vs. Croatia 2nd half 0-45min. 1998.6.20.)

次は代表チームのデータを取ってきましたそのひとつなんですが、日本代表チームの試合中の動きを5分ごとに表したものです。試合が進むにつれて落ちてくる様子がお分かりかと思います。



日本代表チームポジション別移動距離の経時的変化
(1978-1996、17試合のデータより大橋作図)

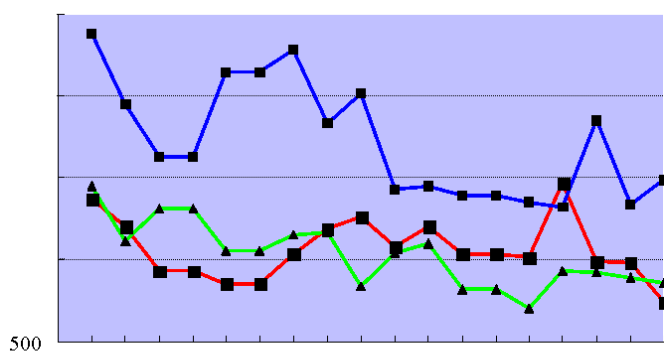
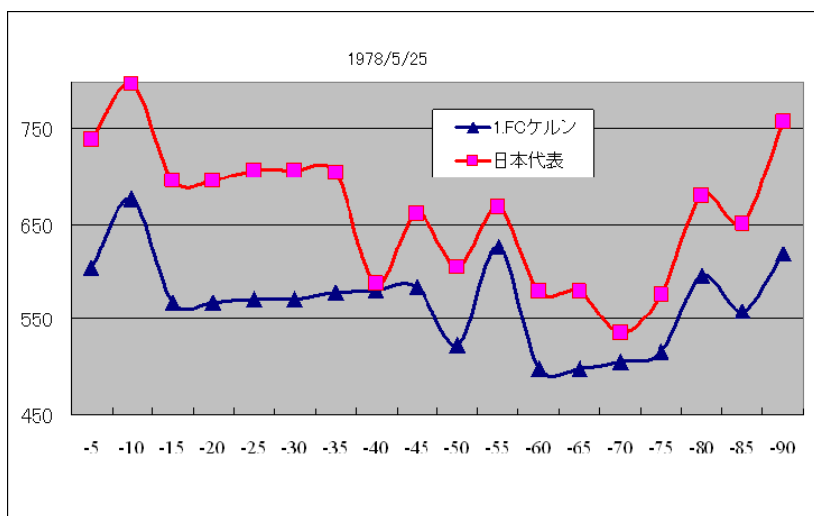


トヨタカップにおけるポジション別移動距離の経時的変化
(1981-1994、12試合のデータより大橋作図)

次はトヨタカップのデータです。約2百人の選手のデータです。後半になっても動きがあまり落ちないというのが特長かと思います。次は昨日、古いデータから引っ張り出してきたものでして、1 F C ケルンが1977年に来日したときのものです。代表チームはドイツ代表とは試合をさせてもらえなかった時期です。驚いたことに前半は5分間に日本の

選手が 100 メートル以上多く動いていることが、昨日データ整理をして初めて分かりました。サッカーは進化していて、この当時と今とでは変化があったと思います。

次は J リーグができてまもなくの頃なのですが、一番下の赤のグラフが J リーグの試合です。上の方のブルーは割合古い代表チームの移動距離です。以前は、前半に非常に多く動いていたけれども後半にかなり落ちてきてしまっていたものが、最近ではトータルの動く量は減っているんですけども 90 分間あまり減少せずに動けるようになってきた、その証拠だと感じました。



試合経過にともなう移動距離の変動

日本フットボール学会の会長と紹介していただいたんですけれども、このサロンのポリシーと重なるところがあります。研究者だけではなくて現場のコーチ、フットボールに関わるさまざまな分野の人たちが集まっているいろんな議論をしようよという会です。正月明けに、子どもたちを育成するためにどんなやり方がよいのだろうかというテーマで、サッカー、アメリカン・フットボール、ラグビーの3つのフットボールの関係者に集まっていたいて大いにディスカッションしたいと考えています。日本という国を長いこと観察していただいているクラマーさんに、私たちが今目指している日本にとって一番いいやり方についてご示唆いただければと思います。もうすでにたくさんのヒントはいただいていますけれども。

●いい競争状態を作り出すことが大切だ

クラマー

プロと同じような形で定期的に試合をしていく、リーグをしていくということが一番いいんじゃないかと思います。年齢別であったり、クラブ別であったり。ドイツでは、ジュニアを育成するのに、あまりにもリーグとか試合に重きを置きすぎるという批判があったんですね。トレーニングの時間が少ないことに対する批判です。そこでチャンピオンシップとか競争といった要素を少なくしたんですね。しかし結果としてはそういったことはよくなかったのです。子どもが成長していく過程で、サッカーにおけるパフォーマンスをよくしていくことが当然重要なわけですが、そのために競争というものが常に重要な要素だと思うのです。ですから定期的に大会を行うとか、定期的に試合をすることが一番いいメソッドだと思います。

今ドイツでは、8歳、10歳、12歳、14歳、16歳、18歳ごとにリーグがあって、定期的に試合をしています。ただ、リーグのチーム数なんですけど、当然それぞれ違ってまして、18歳のリーグですとチーム数は18、年齢が低くなるにつれてチーム数は少なくなっていくし、大会も少なくなっています。8歳と10歳のリーグでは試合の選手数を11人ではなく7人で行っています。当然、ゴールもグラウンドも小さくしています。試合の時間も短縮しています。ですからピッチを2つに分けてもいいですし、4分の1に分けてもいいわけです。チームの選手が少なければ少ないほど選手の一人ひとりがボールに触る機会は多くなりますので。11対11でやってしまうとあまり巧くない子どもはほとんどボールに触る機会がなくなってしまう。もし私が誰かにパスをしてその子がミスをして私のところにパスがかえってこなかったら、次に下手な子にはパスしないということになってしまいます。オランダでは16歳まではチャンピオンシップではないのですが、4対4という形でやっています。ピッチがそれだけ小さくなってボールとのコンタクトが増えています。

サッカーは、攻めと守りの双方からできているゲームです。ボールを奪われたらすぐにディフェンスに移り、ボールを奪ったら攻撃に出る。選手は常に動いていなくては行けないのです。メキシコ・オリンピックで日本代表の練習をしたときに、ちょっと気を抜いてしまう選手を私たちはコカコーラと名付けたのです。当時ドイツでコカコーラの宣伝があって、「テイク・ア・ブレイク、コカコーラ」、つまり、ちょっと一息入れようとぼうっと立っている選手に、おいコカコーラ、何やってるんだ、と言いました。杉山さんはコカコーラの典型でしたね。私は外から見ていたのですが、彼が練習中に足を止めるとき「コカコーラ冷えているぞ！」と言ったら彼は怒って少しアグレッシブになりました。宮本征勝さんは亡くなってしまいましたが、私はこの人のことをプロフェッショナルと呼んでいました。彼は勇気を持って果敢に攻めるので、ディフェンダーをやりこめてしまう技術をもっていたのです。しかし彼も十分に攻撃的かというところでない部分もあって、そのときには彼にも「コカコーラ何やっているんだ」と言いました。ボールを奪ったのであればすぐに前進、ボールを奪われたのであれば、すぐにディフェンスの準備をすることです。

宮本さんにしても釜本さんにしてもそうなのですが、攻撃も守備もできなければいけない、この2つの機能を果たさなければいけないと言いつけていました。4対4でやると両方の機能、攻撃と守備をよく習得できます。ですから私は10歳を区切りに4対4でプレーをするということを推進していきたいと思っています。かつて日本でそれを推進しようと尽力したのですが、当時は組織的な理由で無理だったんですね。場所が足りなかったのです。オランダはたくさん場所があるので4対4で十分にできたのです。ドイツからオランダのアムステルダムに高速道路を走っていくと至る所にピッチが見られるくらい、オランダには場所がたくさんあるのです。

●メキシコ・オリンピックのチームは私の誇り

とにかく若い人たちを育成するために大切なことはトレーニングをさせる、そのときに勝つという、闘争心というものを教えていくことが重要だと思います。また、さらにフェアプレーをとことん教えていかなければいけませんね。シミュレーションについては、厳しく、いけないと教えないといけません。それから重要なことは、もし勝てなくても、負けたとして全力を出す、ベストを尽くすということです。もし負けたとしてベストを尽くしたんだとすれば、なんでああいうことをやっておかなかったんだという気持ち、自己批判は出てこないと思うのです。負けて、もう1回やらしてもらえば勝てるなんていうことではないわけです。そういう子どもには全力を尽くすということを教えなければいけません。もし本当に全力を尽くしたのなら疲れ果てて次の試合をできるような状況ではないと思います。食事ものどを通らないくらいです。今私が申し上げたことで最後です。もう質問は終わりです。

最後にひと言、1968年に日本はメキシコ・オリンピックでメキシコに2-0で勝って銅メダルを得たわけです。釜本さんが2つのシュートを決めました。杉山さんからの素晴らしいパスもありました。釜本さんと杉山さんは本当に世界レベルのパートナーでした。2人はいいコンビネーションでした。みんなですごく喜んで、スタジアムも10万人と満員で、試合後に道路が封鎖されて外に出ることができなかったのです。オリンピックの選手村に到着したのは遅くなってからでした。勝ったときはすごく喜んでいたのですが、時間が経って選手村に着いたときにはみんな冷静になっていました。そして寝室に行って、倒れ込むように寝てしまいました。これまで誰にも言うことはなかったのですが。みんな毛布にくるまって味噌汁を飲んだのです。お医者さんがみんなの血圧を測るほど、それほどみんなグロッキー状態でした。それを思い出すと感激します。それほど全力を出したということです。戦争で死ぬか生きるかという状況になったときのように、選手は100%、それ以上の力を出してくれたと思います。

本当のサッカー、サッカーの神髄はそこにあるのではないかと思います。ですから、私はあのチームをいまでも心から愛しています。それぞれプレーヤーは個性豊かな人たちでした。しかし全員に共通していたことは、自分の持っているものをすべてチームに投入したということです。ですから、サッカーとは人生のいい教師ではないかと思います。その20年後、1988年にみんなで会おうと言うと、どんなことがあっても駆けつけてくるわけです。残念ながら渡辺さん、宮本さんは亡くなっていて来られなかったのですが…。サッカーを通して人間が作られていくと思います。同じように1954年のフリッツ・ワルター率いるドイツ代表チームでも、素晴らしい人格を備えたプレーヤーがチームを形成しました。

私のサッカー哲学とは、チームのために全力を尽くす、チームにとって害になるようなことは決してやらないということです。私は2つのシュートを決めた釜本さんがスターであるとは決して言いませんでした。スターはチーム全員です。とにかく私の一生忘れることのできない体験でした。

中 塚

ありがとうございました。時間が足りなくなったのは進行役の不手際ではないと思います。伝説の、歴史上の人物であったクラマーさんがこの場にいてくださって、直に、その肉声を、熱さを伝えてくださった。その結果としての時間かなと思います。提言に即した進行ということだと思いますと、リーグ戦のことですとか、代表チームのことですとか、そこまで至りませんでした。あえてここではその内容には触れずに、クラマーさんの温かいお言葉を聞いて、それを我々の糧にしよう、というところでシンポジウムの締めにしたと思います。

加 納（司会）

それでは、若干時間も押して参りましたけれども、最後にクラマーさんへの感謝を込めて、ワールドカップ・ドイツ大会への出場を決めた試合を短く編集したビデオをご覧いただきたいと思います。その最後に「クラマーさんありがとう」とドイツ語の感謝の言葉をみなさんでご唱和していただき、拍手をもってこのシンポジウムを終わりたいと思います。よろしくお願いいたします。

（ビデオ上映～感謝の言葉・拍手）

（Basten Dank Herr Cramer! クラマーさん本当にありがとう!）

賀 川

クラマーさんのせつかくの素晴らしいスピーチの後で説明を加えると、あちこちでやっているテレビ放送の解説みたいで蛇足になるかもしれないと言わなかったのですが、クラマーさんは1975年のヨーロッパ・チャンピオンズカップ、今のチャンピオンズリーグでバイエルン・ミュンヘンが優勝したときに、ヨーロッパの記者がヨーロッパ・ナンバーワンになったことがあなたにとっての最大のプライドでしょう、と質問しました。しかしクラマーさんは、私にとって最大の勝利は1968年にアマチュアの日本代表チームが銅メダルを取ったことだ、と答えました。なぜかというと、スペイン、ブラジル、ナイジェリアなど、サッカー王国ともいえるべき6カ国を相手にして3位になった、ノックアウトシステムですけど、6カ国を相手に3位になった、しかもその試合の後で全員がぶっ倒れるほどの試合をしたと。何人かの選手がぶっ倒れるのは、自分も見たことがある、しかし11人全員が試合後にぶっ倒れたのを見たのは初めてで、そういうチームを率いたことが私のプライドである、というヨーロッパ・チャンピオンになったときのコメントだったんですね。それだけです。ちなみにこういう話は私のサイトにありますから読んでみてください。

加 納（司会）

みなさま、長いことありがとうございました。最後に出口までクラマーさんを拍手でお送りしたいと思います。お時間が許しましたら、ご協力お願いいたします。（拍手）